大牟田からは、原水禁世界大会長崎大会に、多数の労仂者が参加した。このハッピも、すでになじみとなったが、核保有国はますます広がり、実験はそこかしこでうち続いている。

核全廃へ総決起を

援護法もう待てない

被爆29周年原水禁世界大会

「爆音も聞かず、飛影も見ず、ただそれだけなのに……」人類の悲劇・ただ一瞬のせん光によって数十万人の命を奪った原子爆弾。八月六日、あの「暑い日」がまた広島にめぐってきた。

世界が核時代に突入して二十九年目の今年、アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国、そして非同盟の盟主とまでいわれていたインドまでが核実験を強行した。こうした情勢の中で原水禁国民会議は八月五、六日、広島で「いかなる国の核兵器にも反対し、原水爆の全面禁止を実現しよう」と被爆二十九周年原水爆禁止世界大会を開いた。

大会は初日の五日、森滝原水禁国民会議代表委員らを先頭に参加者全員が原爆慰霊碑に参拝、黙禱したあと、市内をデモ行進して、午後六時から同市基町の県立体育館で開会総会を開いた。参加者は約七〇〇〇人。外国からはアラブ連盟、パキスタン、フランスそして六番目の核保有国となったインド代表など、一国際団体、七カ国の十四人も参加した。

総会では市川総評議長、成田社会党委員長、そしてこの大会に初めて参加した公明党の浅井副委員長らが次々にあいさつ。その中で市川総評議長は「二十九年前、アメリカののろうべき原子爆弾投下により尊い生命を失われた多くの方々のご冥福を心からお祈りするとともに、今日なお原爆症で苦しんでいる被爆者の方々の一日も早い回復を願う」と前置きしながら「被爆者援護法の制定なくして戦後は終らない。戦争の責任を追及し、三度誤ちは繰り返さぬという原水禁運動の誓いを忘れることなく、政府・自民党に対する物乞い的陳情ではなく、爆発的な国民世論のうねりの中から全国民の要求としてこの実現を迫らなければならない」と決意表明をした。続いてあいさつに立った成田社会党委員長も「来年の被爆三十周年までに被爆者援護法、日本の非核武装を軸にしたアジア太平洋非核武装地域の設定を実現しなければならない」と力強く述べた。

このあと海外代表が一人ずつ紹介され、一行を代表してフランスのポリネシア選出国会議員サンフォード氏が「フランスの核実験が現在ポリネシアで行なわれている。皆さんが原爆で苦しめられたように、われわれはムルロアでの核実験で苦しんでいる。世界中の核実験をにくみ、すべての平和破壊者をにくむ」と連帯のあいさつを述べた。

次いで基調報告に立った森滝一郎代表委員は「被爆者援護法をかちとるための国民的大行動を決意した」と口火を切り、核拡散の状況下で平和利用の名のもとに進められている核開発について「自然のエネルギーを開発すべきで、安全性が不確実な現段階では容認できない」と否定、「核廃絶を求め国民的統一行動をおこし、国際的にも大きな連帯行動をかけるべき時だ」と運動統一と国際連帯の課題を提出した。

さらに被爆者の立場から下江武介さんが、その悲惨な現状を切々と訴えながら「二十九年もたってまだ援護法が制定されていない。もう待てない……」と痛烈に訴えかけた。

最後に「いかなる国の核兵器にも反対し、被爆者援護法を至急に実現させよう」との広島アピールを採択してこの日の日程を終了。翌六日は「被爆者問題」「沖縄・核基地」「原発・再処理」など六つの分科会で討論。大会は七日から舞台を長崎に移した。

（労仂ニュース）

一句の川柳

▼…新聞を読んでゆくうち、ふと次の川柳が目にとまった。

老夫婦無言で余生つなぎ合い
喜びも悲しみも分ち合い、扶け合い生きて来た二人。きびしい世のなかを生きる老夫婦の、わびしさのなかにひとすじの明るさのただよう味わいと、人生というもののコクがある。

×

宮浦退職者集まる会新聞
〝みやうら〟から。

中央母親大会に参加して

暑さも吹き飛ぶ感激

主婦会　斉藤清子

八月十～十一日の二日間、中央母親大会が行なわれました。三池主婦会より私が一名、皆様のカンパに依り、出席できましたことを心から御礼申し上げ、かんたんですがご報告申し上げます。

第一日目は立教大学、豊昭学園、明治大学と三個所で、四十四分科会にわかれ、討論が行なわれました。

参加人員は四万を超え、南は沖縄から、北は北海道より参加した人たちが、自分たちが討論する教室を探すのにひと苦労でした。

私は、明治大学の第三十分科会の労働災害、職業病、という所に入り、労働災害のおそろしさ、むごたらしさ、また、災害にあった犠牲者や家族の苦しみ、資本家の合理化と言う美名の陰に、三池でも多くの仲間たちが苦しみ、闘っていること。

また、CO闘争の内容、裁判闘争にとりくんで闘っている原告団をはじめ、その闘いを自分の闘いとして闘っている三池労組、主婦会、全国のなかまたちの支援の実状を語り、大爆発より十一年、ひと口には言い表わすことはできませんが、私たちはあくまで労働者の権利と、資本家のために命までうばわれていることは絶対に許さない、ということを訴えました。

また、討論の中で、各職場の若い人たちが、職業病と言われている肩腕障害や腰痛障害で、結婚前に肩や首、腕等にシップ薬を張って勤務しているのに、患者と健康な人をつないでの、職業病としてのとりくみが、思うように行なわれない苦しい実態、などの報告もありました。

痛む肩や腕をさすりさすり、涙ながら真剣に訴えられる人に、助言者の、元三池労組員でした蒲池清一さんも、職業病として認定されるようにくわしく助言され、午前十時から午後四時三十分までの長時間、流れる汗をふきながらの活発な討論は続き、第一日目は終りました。

第二日目は九段の武道館に、二万二千人の全国のお母さんたちが集まり、来賓の、東京都知事の美濃部さんから挨拶をうけ、続いて、丸岡秀子さんより、「母親が変れば社会がかわる」、という記念講演があり、私も母親の一人として今後の運動に心して行動し、たとえりっぱな母親にはなれなくても、子供たちから笑われない母親になろうと思いました。

午後は中央合唱団により、母親音頭という歌と踊りの発表会に入り、会場からの飛び入りで舞台と会場が一体になり、楽しく、力強く、暑さも吹き飛ぶほどでした。

続いて、母親運動二十年のあゆみと題した構成劇があり、二十年の闘いや苦しみが、年代を追ってくりひろげられ、手にとるように理解され、初参加の私にもよくわかるように演出されていました。

席を立って武道館を出てからも、丸岡秀子さんが力強い講演で、「母親が変れば社会がかわる」、と力説された言葉が耳の底に残り、感激のうちに東京を後にしました。

かんたんで報告にならなかったと思いますが、以上で終ります。

主張

賃金展開の本質見破り支配の打破へ

組織分裂から十四年、三井資本による合理化攻撃は、数多くの仲間の生命を奪い、共稼ぎをして最低生活を支える年々の移り変りであった。

今春闘において、一方千四百円の賃上げを闘い取ったのもつかの間、インフレと高物価政策、職場の合理化と賃金展開で、資本の側は、われわれが闘い取った額以上の利益を掌中にしようとやっきになっている。

とくに三池炭鉱においては従来、十月一日から新賃金の展開を行なってきたのであるが、今年は九月一日から賃金展開を強行しようとしている。

いうまでもなくそれは、早く賃金展開を行なうことで、より以上の利益を追求できるからである。

会社の利潤追求の手段として、三池炭鉱ほど好条件を兼ね備えている企業はめったにない。

まず第一に、出来高給制度という、前近代的な賃金のしくみが土台となっており、この査定は、職制の筆先一つでどうにでもなる。

したがって、働く者は「自分の能力で生活が安定する」、と思いこむようにされており、現場では保安や、権利さえ投げ売って働くようにならされている。

身体の危険や超労働強化、超長時間労働の、なかば強制的な作業が、働く者の側の意志で行なわれ、賃金の上昇や低下を「生産能力」という、職制の勝手な判断で左右される状況だからである。

一律精算のときには、各人の従事職種、支払形態別に、出勤方数によって、上昇分が支払われるから、明確に各個人にどう支払われたかがわかるが、いざ展開されたあとは、「C級、作業量、および各人の能力」と、職制の勝手な評価によって、賃上げ分や能率上昇分は吹き飛ばされる結果になる。

実質上は、各人の手取り額が多くなるのは、労働強化と作業量の増大による分だけである。

第二に、出来高給という、資本にとって、もっとも好都合な賃金制度を利用し、徹底した差別を三池労組員一人ひとりに押しつけ、会社は、それも見せかけだけのことだが、新労組員優遇の姿勢をとり続けてきた。分裂後の十四年間の歴史は、三池炭鉱のすべての労働者が、中小炭鉱以下の賃金・労働条件で働かされてきた過程である。

分裂前――三池闘争前の職場闘争で闘い取った賃金・労働条件は、七百鉱を数えたわが国の炭鉱の中でも最高のものであったが、いまは、文字通り極端な低賃金・低労働条件を押しつけられている。

産業別による賃金の額上げが、全部の炭鉱がほとんど同額で行なわれてきたにもかかわらず、このような格差を生んだのは、まさに合理化の一手段としての賃金展開にあることが歴然としている。

第三に、同一企業内に二つの組合があり、労使協調を運動の路線とする新労組は、平和協定の枠にしばられ、経済的な生活向上のための闘いをさえ放棄している。

このように、三池炭鉱が、月人当り能率九十トンという恐るべき生産をあげながら、賃金は中小企業以下という実態にあるのは、出来高給という搾取制度と、差別、分裂支配、平和協定という三つの主要な条件によっている。

われわれは賃金展開に当って、その根本にあるものを問題にするために、全職種、全作業者に、能率アップ分も含めて、一律に本人給にプラスすること、他山（たとえば北海道の南大夕張労組など）との格差を是正するため、基準内賃金を無条件に二千円ひきあげよ――という要求を、つきつけている。現在の、会社の一方的な賃金展開を許すならば、すぐさま標準作業量のひきあげ、目安単価の切り捨て、職制の勝手な賃金処理によって、資本はますます働く者の命を奪い、生活の再低落となることは避けられないだろう。

出来高給制度はその性格から、ややもすれば、各人の能力を基礎に賃金が支払われるように見えるところから、「インフレ・物価高から生活を守るために精一ぱい働く」という風潮をひき起こす。それは、たとえ各人がどれほど能力をしぼって競争しようが、インフレ・高物価に勝つことができないばかりか、恐ろしいことに、自分自身の生命と健康を破壊することにしかならないだろう。

働く者にとっては、組織的な力がすべてである。インフレ・物価高には、独占資本と反動田中自民党政府に対決する、政治的な闘いを強めなければならず、三井独占に対する闘いには、三池労組員の職場・地域における闘いと、それを軸とした新労組員への広範な働きかけが不可欠である。

われわれの要求が新労組員にも理解され、現場から賃金展開・賃金支配の不合理の打破を課題とし、得るとき、必ずや展望をつかむこともできる。

×